

令和4年度 府中市立南町小学校 学校経営計画

校長 島田 文江

1 教育目標及びめざす学校像、教師像

(1) 教育目標

- ① たくましい子
- ② 思いやりのある子
- ③ 努力する子

(2) めざす学校像

- ① 児童の確かな学力・体力を育てる学校
- ② 児童の豊かな心を育てる学校
- ③ 児童がチャレンジできる環境の整った学校

(3) めざす教師像

- ① 心身ともに健康である教師
- ② 児童に愛情を注ぎ、児童の成長のために努力する、自己の職務に誇りをもつ教師
- ③ 自己の将来に希望をもち、教職員同士切磋琢磨しながら真摯に学ぶ教師

2 教育目標を実現するための中長期的な目標と方策（4年目）

【学校の教育目標と（あいことば）⇔達成のための手立て】

- たくましい子（えがお） ⇔「運動習慣」で豊かなスポーツライフ、「読書」で学力向上
- 思いやりのある子（あいさつ） ⇔「困ったら一緒にやろう」と助け合える関係を作る。
- 努力する子（チャレンジ） ⇔「見通し・振り返り」を行い、個や共通の願いを叶える。

(1) たくましい子「笑顔」

- ① 学校を児童が登校することを楽しみにする場とする。
- ② 友達との考えや思いの一致によって自信を深め、友達との違いにより新たな学びに気付き、自分の世界を広める。

(2) 思いやりのある子「思いやり」

- ① 友達の「良さ」を認め合い、それが発揮されたときには温かく称賛しあえる仲間関係を構築する。
- ② 教師は児童にとってのよき聞き手、よき話し相手となり、良好な相互関係やコミュニケーションを構築し、児童理解に努めるとともに、児童のコミュニケーション能力の基礎を養う。

(3) 努力する子「チャレンジ精神」

- ① 児童が困難な問題に挑戦しようとする意欲を高め、成功体験により自信をもつ。
- ② 温かい仲間意識のもと、あきらめずに、努力する。

3 今年度の教育活動の取組

(1) たくましい子「笑顔」の実現のために

過去の学力定着度調査を振り返ると、国語の問題文を読む時間が足りなかったと答える児童の割合が高かった。資料を比較して読み取ること、自分の考えを書くことも苦手としていた。今年度は、学習の基盤といわれる言語能力や情報活用能力の育成を図る。基礎・基本となる知識や技能の習得と同時に、実践を伴う思考力と表現力も伸長する。「学校・学年・学級のめあて」を定めて目指す。さらに、個人内の成果を見える化し、学ぶ楽しさを味わわせる。

① 基礎的・基本的な知識と技能を習得するための取組

- ・各学期の読書旬間、読書記録カード、学年の課題図書等、読書活動に重点を置き、学力向上を図る。
- ・授業や朝会で、話を聞く姿勢をさらに指導し、話の内容を聞き取る力を育てる。
- ・図書資料から必要な情報を選んで活用できる力を育てる。
- ・チャレンジ検定を年3回実施する。(6/24 計算検定、10/27 漢字検定、2/17 英単語検定。)
- ・低学年から算数の少人数指導・習熟度別指導を実施し、計算力を高める。
- ・ALT や講師と共に外国語や生活・文化について学び、地域の理解を深める。
- ・幼保小や小中の連携を図り、幼稚園・保育園から中学校卒業までの学びを滑らかにつなぐ。

② 思考力・判断力・表現力を育成する取組

- ・e ライブラリアドバンスを活用し、家庭学習に自主学习や反転学習を取り入れる。
- ・学力定着度調査の結果を受け、国語と社会に課題が多く残る実態を改善する。
- ・スローリーディングの手法で、初めての文章の内容でも時間をかけて理解できるようにする。
- ・郷土の森や水田の作業に全児童がかかわり、得た知見をさまざまな手法で表現する。
- ・特別活動において、教職員は子供たちの主体的な活動を支援する。
- ・プログラミングの学習を通して論理的思考と構成や組み合わせを工夫した表現の経験をする。
- ・思考力育成シートや1枚ポートフォリオを活用し、児童の思考力と表現力を育成する。
- ・自分の言動を客観的に見る力と、自らの課題を解決する方法を選んで使う力の育成を図る。
- ・発達段階に応じて、自分に合った課題を見付け、仲間と協働して、同じ目的に向かう。

③ SDG s の対象となる様々な目標への取組

- ・持続可能な社会の実現を目指し総合的な学習の時間や特別活動の身近な取組から始める。
- ・児童の人間性を育み、人同士の関わりとつながりを尊重できる態度の育成を図る。
- ・SDG s を支える「Society5.0」の社会を目指し、ICT 機器を活用する。

④ 体力向上と心身の健康の増進を図る取組

- ・体育の学習を通し「すすんで運動できる児童の育成」に取り組む。
- ・水泳、持久走チャレンジ、縄跳びチャレンジを実施し運動を楽しむ。
- ・体力テストの結果分析と連携させた体育科の授業をするために環境を工夫する。
- ・活動に応じたコーディネーショントレーニングを取り入れる。

⑤ 望ましい食習慣の確立を図る取組

- ・児童のアレルギー反応についての確実な情報提供を保護者に依頼し、安全な給食の運営をする。
- ・年3回の「アレルギー対応訓練」の実施および、リーフレットの内容確認を行う。

(2) 思いやりのある子「明るいあいさつ」の実現のために

過去の学校評価アンケートによると、「友達に優しくしようところがけている」と回答した児童の多くが、学校生活のルールを守り、学習や生活に安心して取り組んでいることが分かった。感染予防の観点で学校単位の行事は未だに難しくはあるが、三密を避けるために ICT を活用する等工夫して特別活動の行事が少しずつできるようになってきた。リーダーシップとフォロアーシップを見たり体験したりすることで学ばせたい。児童に分かりやすいように「いちばんやさしい学校づくり」を目指す。

① 規範意識の定着

- ・南町小学校のきまりである「心響かせ学び合う南っ子」を学校と家庭の両方で掲示し徹底を図る。
- ・授業では教師自らが手本となり、家庭にも協力を仰いで、正しい言葉遣いを身に付ける。
- ・清掃のスタンダードと週末の持ち物の整理整頓を徹底し校内美化を図る。
- ・三中学区の3つの小・中学校で、共通の授業規律「みそあじじ」「語先後礼」の徹底に努める。

② 不登校児童、遅刻の多い児童への指導の強化

- ・保護者との面談を週単位、月単位で定期的実施し、子供や保護者の立場で解決に努める。
- ・担任は管理職と連携し、学校と家庭の連携支援員による電話相談・家庭訪問・面談を実施する。
- ・特別支援コーディネーターは、管理職・SC・ひばり教員と共に「校内委員会」で対策を図る。

③ いじめの未然防止、早期発見、早期解決

- ・日常的な児童観察、児童理解に努め、軽微ないじめも見逃さないように生活指導夕会で情報交換する。
- ・保護者と日常から信頼関係を築き、保護者の理解と協力を得ていじめの解決を図る。
- ・学校サポートチームや地域住民による見守りや声かけ等の支援を依頼する。
- ・年間3回の「フレンドリーアンケート」を実施し、未然防止・早期発見・早期対応に努める。
- ・生活指導部の「ふれあい月間」の取組として、一人一人を大切にする標語を作り家庭と共有する。
- ・特別活動部が「フレンドリー集会」を開き、児童が主体的に考えいじめ防止の行動できるようにする。

④ 児童の思いやりや感動する心を育む。

- ・児童の言動を細かく観察し、思いやりのある言動を認め、強化する。
- ・児童自身に言動を振り返り、改善点を考えさせる指導を実施する。
- ・授業において多様な考えを引き出し、認め合い、一人一人の違いを受け入れる指導を実施する。
- ・生活指導部が中心となり敬称を付けて名前を呼び合う指導を行い、言語環境を整える。

⑤ 道徳科で他者と伝え合い、自己の生き方について考えを深める。

- ・「相手の立場を考えて、思いやりをもって行動する子供の育成」を道徳教育の重点項目とする。
- ・対話や議論などの指導方法を工夫し、「考える道徳」「議論する道徳」への質的な転換を図る。
- ・5/21 に道徳授業地区公開講座を実施する。「よりよく生きるための読書活動」について親子で学ぶ。
- ・道徳教育推進教師を中心に道徳の時間の充実のための研修会を行う。

⑥ 特別支援教育の充実を図る。

- ・特別支援教室「ひばり」を、朝会や学校だよりで周知し、児童や保護者の理解を深める。
- ・特別支援学級「仲よし」への転学は、保護者や児童に十分な説明を行ってからにする。
- ・障害のある児童を受け入れ、協力し助け合い、違いを認める学級経営を推進する。
- ・障害のある児童への「特別な支援」がすべての児童への支援につながることを認識する。
- ・仲よし学級は、特別活動の学校行事や委員会・クラブ活動を通して通常級と交流する。

(3) 努力する子（「チャレンジ精神」）の実現のために

過去の学校評価アンケートによると、「学校は、目標を定めてチャレンジする子を育てている」と回答した保護者の多くが、たくましい子・思いやりのある子を育てているという項目で、肯定的であった。今年度は、できた、分かった、伸びたことの見える化をより一層図りたい。そのために各分掌が横のつながりを持ち、その都度、必要なチームとなって目標の達成に努める。教える方・学ぶ方の両者とも、自己調整能力と個別最適化の手法を、「かがみと宝箱」として目指す。

① チャレンジのための環境整備

ICT

- ・授業中はタブレットを机の傍らに置き、ルールとマナーを守りながらいつでも使えるようにする。
- ・タブレットを使った方が、理解が深まる児童には、常時タブレットの使用ができるようにする。
- ・全学年が保護者と一緒に情報モラルを学ぶ場を、各学期に一度ずつ3回に分けて設ける。
- ・組織的に ICT の日常化を図り、教員が ICT を OJT 形式で学び合う。
- ・児童がスキルとモラルを十分に学んだ上で、Web 博物館に児童が作成したコンテンツを展示する。
- ・Web 博物館が、地域や PTA と学校の授業をつなぐプラットフォームの役割を担う。

読書活動

- ・始業前の朝の活動を「朝活10」と名付け、黙って読書をするを推奨する。
- ・学期に1回ずつ読書旬間をもち読書活動を推進する。ゲストティーチャーを招いて講演を聞く。
- ・QRコードを使い図書室の本やお勧め本を読む。読書ノートに記録し励みとする。
- ・階段の踊り場に「言語活動コーナー」を設け、毛筆や硬筆の作品、お勧め本等を紹介する。

体力向上

- ・すすんで運動できる児童を目指し、実技研修を通して教師自らが運動に親しむ。
- ・体力テストの結果を分析し児童の基礎体力の向上に生かす。
- ・頑張りカードを通して児童には運動習慣を身に付けさせる。

② 学年・学級経営の充実

- ・発達段階に応じた児童の自主性や協調性を育成し、家庭と連携した学年・学級経営を実施する。
- ・学年主任のリーダーシップの下、家庭学習の内容、指導状況を学年で共通理解し指導する。
- ・学年主任会で学年間の情報交換をする。学力・体力・ICTのOJT研修を通し授業改善に努める。
- ・ローブチャレンジや漢字検定等、学級や学年で協同・協働してチャレンジすることを推奨する。
- ・個別最適化の学習を実践するために、個別の指導計画をたてる。

③ 地域・保護者との連携

- ・保護者や地域の願いを丁寧に聞き取り、実現できるように努める。
- ・危機管理意識を高め、スクールコミュニティ委員会と共に災害に備える。
- ・個に応じた学習支援・プラスバンドの発表会支援・タグラグビーの指導を依頼する。
- ・PTA おやじの会に安全ボランティア、環境ボランティアを依頼する。

④ 教員の働き方改革

- ・管理職がイクボス宣言をする。子育て・介護中の教員も能力を發揮した働き方ができるようにする。
- ・漢字検定合格という目標を定め地域ボランティア「漢字応援団」に、プリントの丸付けを依頼する。
- ・夕方6時以降、翌朝7時半までは学校は留守電とする。欠席連絡はスマート連絡帳で受ける。